



# テリトリー

---

---

ミルクティー

---

いわば縄張りとも言うのかもしれない。一ヶ月に一度、いや二週間に一度必ず行く場所がある。特に用事があるわけでもない。足が自然にその場所に向かうのだ。

まるで双子のようにそびえ建つ駅ビルの十三階。

透かしガラス越しに外の景色を見ながら一階から十二階まではエレベーターで、そこからは少し場所を移動し、小さなエスカレーターを利用する。

エスカレーターを昇りきると、見慣れた珈琲ショップの看板が見える。小さなフードコートを備えたこの場所はいつも人がたえない。いつ行っても人がいる。待ち合わせに利用したりおしゃべりをしたり、スーツ姿のサラリーマンがパソコン片手にコーヒーを傾けている姿もあったりなんかする。

誰一人として知り合いはいないのだが、ここにいるとなぜか心が落ち着く。

違うものなど選ばなくせにひとしきりメニュー表を見て悩んだ後、わたしは珈琲ショップでカフェモカか本日の珈琲を注文する。

ゆっくりと珈琲を飲みながら、その日の出来事を思い返してみたり、時には小説を取り出して読んだりする。そんなときのわたしは、きっと周りの空気と一体化して、誰にも見えない存在になっているのだと思う。いつも周りを見渡して人間観察をし、そして小説を読んだり、考え事をする。わたしが唯一のんびりする時間なのかもしれない。

出身が名古屋でないわたしが名古屋に溶け込むのは簡単だった。関西人のくせに、少しのろまなところがあるわたしだったが、どこか豪快でそれでいて気さくで地元が大好きな名古屋人は見えて面白くもあり好きだった。わたしの大好きな人が名古屋出身だったせいもあるだろう。彼がわたしを振り向くことなどないと感じてはいたが、それを抜きにしても、わたしにとって名古屋は特別な場所だった。地元に戻ってきなさいと口をすっぱくして言う両親の言葉を痛いと感じながら名古屋に就職したのもそれが理由だ。

半分ほどに減った珈琲を片手にわたしは周囲を伺った。台風による影響で東京行きの新幹線は予定よりかなり遅れている。その為か、いつにもましてスーツ姿のサラリーマンが多い。東京行きの新幹線の復旧を待っているのだろう。

今日は金曜日。お盆休み返上の代わりに夏季休暇をとったわたしは、ジーンズにティーシャツの出で立ちで異世界から来た人のように浮いていた。学生時代は平日であれ、当たり前のように出歩いていたのに、それが嘘のように思える。違和感、そして奇妙な懐かしさ。

わたしが好きな人は、夜勤が多く平日が休みになることが多いらしい。それならば休日は今のわたしのような感覚を持ち合わせているのだろうか。

そこまで考えて、わたしはため息をついた。考えないようにしていたはずなのに…。十三階のこ

の場所はわたしが今まで回避してきた想いを蘇らせ、そして現実に向き合わせる場所でもある。

『このままではダメなんでしょ』心のどこかで分かっているその考えにわたしは頷きながらも、いつも向き合わずにいるのだ。

弱虫で臆病で、そんな自分の性格を直したくて。でも直せなくて。

近くで幸せそうに笑って話している恋人同士を見る。いつかわたしがこんな風に笑える日が来るのだろうか。そう思いながら珈琲を飲む。わたしの好きな人はわたしの想いなど当に知っている。しかし、それが愛だと知っているだろうか。知っていて拒否するのだろうか。意地悪で優しい顔を思い浮かべる。

どうしていいかわからないくらい好きなのに。そんなわたしに彼はつらい事実を告げる。事実を受け止めたくないわたしは逃げて、逃げる。

臆病だから。

空になった珈琲陶器を持ってわたしは返却スポットへと向かう。戻り終わったところでわたしのすぐ横にベビーカーに乗った赤ちゃんがいるのに気づいた。

可愛い。

二歳くらいだろうか。小さなつぶらな目でじっとわたしを見る。思わず笑ってしまう。

「可愛いですね」

近くでわたしに呼びかける声があったので、驚いて振り向いた。スーツ姿の男が立っている。驚いたままのわたしの顔を見てにっこりと笑う。

「そう、ですね」

そう返したわたしに対してもう一度にっこりと笑って、彼は珈琲ショップの列に並びに行った。

もう会うこともないだろう。でも、親近感を覚えた。マイナスの方向に向かっていた思考が、一気にプラスに変えられるような感覚。

わたしの好きな人。いつも跳ね除けられている存在であるわたし。それでも、もう一度頑張ってみようかなと思った。それでダメならそれまでのこと。前に進めばいい。心に春風が通り抜けるような感覚。なんでもできそうなそんな想いが頭と心をよぎる。こんな小さな出来事ひとつでわたしの考え方が百八十度変わるなんてと、思わず笑みが浮かぶ。

大抵のことはそうだ。

たぶん小さな小さな出来事が何かを引き起こすきっかけになるのだ。

友人にこの場所を教えようか。一瞬そう考えて、わたしはその考えをとりやめた。教えないほうがいい。きっと、教えてしまえばわたしのこのテリトリーはなくなる。友人と話すのは楽し

いが、それでもわたしのひとりの時間はなくなってしまう。

再び席に座り小説を開き、わたしはのんびりとあたりを見渡した。

今日も十三階は人であふれている。騒がしくもなく、かといってうるさくもなく。そんなこの場所はわたしのテリトリーだ。